

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 24 年 6 月 7 日現在

機関番号：32606
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2009～2011
 課題番号：21520339
 研究課題名（和文） ベルナール＝マリ・コルテス研究

研究課題名（英文） Studies on Bernad-Marie Koltès

研究代表者

佐伯 隆幸(SAEKI TAKAYUKI)
 学習院大学・文学部・名誉教授

研究者番号：90052521

研究成果の概要（和文）: 本研究の最大の成果としては、演劇研究においてしばしば乖離しがちな「テキスト研究」と「演劇実践」という二つの分野を連結させる試みを企画・実行したことであろう。演劇に関わる日本の若い世代の人たち（演出、俳優、研究など）がフランス人演出家とのワークショップでコルテス作品を体験したことは、研究の世界だけでなく演劇実践の世界にも刺激となったにちがいない。また、研究会を設置したことによって日本におけるベルナール＝マリ・コルテス研究者の育成および発表の場を準備した。日本におけるコルテス研究の裾野を広げるための課題（翻訳の問題や、ワークショップ運営上の問題など）が明確になってきたことも成果の一つであろう。

研究成果の概要（英文）: The major result of our activity has been to unite into one coordinated projects fields like "textual research" and "dramatic practice", which usually tend to be considered separately. A younger generation of Japanese people interested in theater (as directors, actors or for academic reasons) has been confronted to Koltès' dramas through workshops run by french stage directors, thus experimenting how stimulating could be the conjunction of intellectual research and theatrical production. The activities of our research group contributed to diffuse and express Bernard-Marie Koltès studies in Japan. What had to be done in order to enlarge the basis of such studies (translation, workshop organization, etc.) has now been cleared, which could be mentioned as one more positive result of our work.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：政治学・政治学

キーワード：フランス演劇・仏文学

1. 研究開始当初の背景

コルテス研究は、当研究プロジェクト計画時（2008年）において、日本国内ではごくわずかしが行われていなかった。日本語に翻訳され出版された作品は『綿畑の孤独のなかで』および『森の直前の夜』（本研究代表者、佐伯隆幸による翻訳、共に2001年、れんが書房新社より出版の『コルテス戯曲選』に所収。）のみであったことも一因であったと思われる。一般読者にはコルテスの存在そのものがあまり認知されていなかったのである。しかしその一方で佐伯隆幸の翻訳による台本での上演（2003年9月『タバタバ』および『綿畑の孤独のなかで』、2005年4月『ロベルト・ズッコ』、2006年5月『西埠頭』および『森の直前の夜』）が劇団黒テント（於：東京神楽坂の岩戸劇場）によって行われたことにより、演劇に関心のある層の一部はかなりコルテスに興味を持ち始めているという状況であった。

世界的に見ると、最もコルテス研究が進められているのは、やはりフランスにおいてであった。研究書として主要なものは Anne Ubersfeld の *Bernard-Marie Koltès (Actes Sud, 1999)* および Christophe Bident 等によって監修された論文集 *La voix de Koltès* があり、そのほかにフランス語による国際的な研究会も開催され（1999年以來）、その発表論文集も出版されていた。また、大学レベルでも上述の Christophe Bident が中心となってコルテスを対象とした博士論文の指導を行い、研究会も開催されていた。

フランス以外においては、アメリカ合衆国において2008年に The US Koltès Project（コルテスの6作品を10年間で翻訳および上

演するという計画）という大規模な計画が発表されたばかりであった。当時は、アトランタに拠点を置く 7 Stages Theater という劇場が中心になって計画を遂行していくということ以外の詳細情報はなかったが、既存の英訳本ではなく新たに翻訳が行われるということはすなわちコルテス作品のテキストがあらためて検証・研究されるということであろうと推察された。いよいよフランス以外の国でも本格的にコルテス作品が翻訳・上演・研究され始めるという時期であった。

以上のような世界的背景において、日本における唯一のコルテス作品翻訳者である佐伯隆幸はもちろんのことであるが、フランスにおけるコルテス研究に関わっている研究者二人が参加することによって、本研究を日本国内のみならず世界に向けて発表することが可能になると考えた。上述の論文集にもコルテスに関する論文を発表していたヴェロニック・ヴェドレンヌ（大阪大学言語文化研究科特任准教授）と、Christophe Bident の開催した研究会に参加して研究発表も行っていた Vincent Brancourt（慶応義塾大学文学部訪問准教授）である。

また、演劇の研究だけではなく実践にも経験の豊富な佐伯隆幸、フランス語と日本語の通訳・翻訳の可能なティエリ・マレと大野麻奈子によって、演劇実践のワークショップと研究を連結させることも可能になると考えた。

2. 研究の目的

- 1) 日本でのベルナール＝マリ・コルテス研究を推進させる。
- 2) ベルナール＝マリ・コルテス作品に

ついて文学テキストとしての研究、翻訳についての研究（翻訳論）および作品の上演に関する研究（上演史、演出方法など）を包括することを目指す。

- 3) 研究のレベルを世界的なものとするため、フランス語および英語で進められている研究について情報を集め、日本での研究推進に役立てる。
- 4) ベルナール＝マリ・コルテス作品について、日本の劇場とフランスの演出家との共同作業によって、学生および社会人むけの演劇ワークショップを開催することによって、研究および日仏演劇交流を深める。
- 5) テキスト研究と、演劇の実践ワークショップの双方を行うことによって、演劇の研究者と実践者との共同研究を推進させる。

3. 研究の方法

- 1) ベルナール＝マリ・コルテス研究会を設置し、研究会を定期的に開催し、情報交換および若手研究者の育成を中心に共同研究を進めた。
- 2) 研究員それぞれが、論文の口頭または書面での発表を外部研究会などで行うことにより、広い視野での研究を行うようにした。
- 3) ベルナール＝マリ・コルテス作品を扱ったワークショップを開催し、演劇実践の現場において翻訳をはじめとしたテキストの問題を検証、討論して研究した。

4. 研究成果

- 1) ベルナール＝マリ・コルテス研究会を発足させたことにより、フランス文学界および演劇界の若手研究者を育成する基盤を築いた。
- 2) フランス人演出家によるベルナール＝マリ・コルテス作品の演劇実践ワークショップを開催したことによって、日本の演劇界の若い世代の人たち（演出家志望、俳優志望など）はコルテス作品を身体的に体験することができた。コルテス作品の演出経験も豊富な演出家によって、この作家の特異性についても

稽古の各場面で説明を受け、理解を深めた。また、演技指導をはじめとして、稽古から発表会までの段取り・方法なども日本の通常の演劇ワークショップとは異なるフランス式演出を経験したことによって参加者各自の積極性が促された。こうした企画を持続的に行うことにより、日本の演劇界および演劇愛好家にコルテス作品を認知させることのみならず、日本の演劇界に微少なりとも変化を与えることもできるのではないかと思われる。

3) 上述の演劇ワークショップは、演劇実践者のみならず演劇研究者にも大きな成果をもたらした。研究者は通常、テキストを読み、映像または実際の舞台上で上演される戯曲作品を見ることによって研究を進める。しかし、一週間という短いながらも濃密な稽古の場において演出家と俳優たちが遭遇する問題やその進化を目撃することによって、テキストの解釈の可能性の広がりを体験することができた。

また、ワークショップの稽古中に演出家の希望する演出方法にあわせるため、既存の翻訳（佐伯隆幸訳）に変更を加えた箇所もあるのだが、戯曲作品の翻訳についての問題（翻訳がすでに演出であるということなど）もあらためて認識することができた。

さらに、コルテス作品には台詞やト書きのほかにエピグラフなど、上演することのできない要素があるのだが、こうした「上演不能」な要素についての考察もワークショップを通じて発展させられた。

4) ベルナール＝マリ・コルテス研究を日本で発展させるための今後の課題が明確になってきたことも成果の一つである。研究を発展させるためにはまずコルテス作品の読者を増やさなければならないが、そのためには、以下のような方法が考えられる。

- a: コルテスの戯曲作品の翻訳をさらに進め、一般読者の数を増やす。
- b: 戯曲作品だけでなく、コルテスの人物像の伝わりやすい書簡集なども翻訳し、より多くの人に興味を引くようにつとめる。
- c: コルテス作品の魅力を理解してもらうべく、上演または演劇ワークショップを行う。
- d: 上述のような上演またはワークショップに、専門家を交えての座談会や討論会も企画し、興味と理解を深めてもらう。

また 2008 年の研究開始当時に発表され、当時はその詳細情報の無かった The US Bernard-Marie Koltès Project は、コルテス作品の翻訳・上演を 10 年間かけて行うという企画だが、Emory University の協力により、学術的色彩も濃い企画となりつつあるようだ。言語・文化は異なるが同じ作家を扱う企画として情報交換を行うことにより、日本で

のホルテス作品の翻訳・上演についての研究をさらに発展させることができると思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

佐伯 隆幸、「去りゆく背のモノローグ・アンテリユール、または、もうひとつの<<je est un autre>>」、『学習院大学人文科学研究報』、2009年度版、査読なし、2010年、pp. 1-3.

Vincent Brancourt, « Image, nom dans le théâtre de Bernard-Marie Koltès », 『明学佛文論叢』、第43巻、査読なし、2010年、pp.1-33.

Vincent Brancourt, « Vider les lieux : la scène comme lieu d'une présence problématique », 『慶應義塾大学日吉紀要、フランス語フランス文学』、第51巻、査読なし、2010年、pp.119-129.

Védrenne Véronique, « Le théâtre tardif de Samuel Beckett : de la "dis-location" au "suspens" de l'image scénique », 『言語文化研究』、大阪大学大学院言語文化研究科、第37号、査読なし、2011年、pp.251-264.

Vincent Brancourt, « Koltès : un théâtre de la réticence », 『藝文研究』、No.101-2、査読なし、2011年、p.192-211.

Vincent Brancourt, « L'Afrique et l'avenir de la francophonie », *Revue japonaise de didactique du français*, Volume 6, n.2, 査読なし、pp.94-96.

[学会発表](計2件)

Védrenne Véronique, « De la chambre théâtrale à la chambre télévisuelle : étude de Solo et de Trio du Fantôme de Samuel Beckett », 日本学術振興会、2011年2月15日、東北大学。

Védrenne Véronique, « Influences of Cinematographic Writing on Samuel Beckett's Late Drama: Recreating Theatrical Representation », 国際演劇学会 (Fédération Internationale pour la Recherche Théâtrale), 2011年8月8日、大阪大学。

[図書](計2件)

佐伯隆幸、『演劇人佐伯隆幸とは誰なのか ユゴーとベルナール=マリ・ホルテスに沿って(最終講義より)』、学習院大学大学院身体表象文化学専攻刊、2012年、118ページ。

佐伯隆幸「アングラの亡霊」、岡室美奈子・梅山いつき編『六〇年代演劇再考』所収、水声社、2012年、pp.241-256。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐伯 隆幸 (SAEKI TAKAYUKI)
学習院大学・文学部・名誉教授
研究者番号：90052521

(2) 研究分担者

マレ ティエリ (MARÉ THIERRY)
学習院大学・文学部・教授
研究者番号：60188654

大野 麻奈子 (ÔNO MANAKO)
学習院大学・文学部・准教授
研究者番号：00316928

ヴェドレンヌ ヴェロニック
(VÉDRENNE VÉRONIQUE)
大阪大学・外国語学部・特任准教授
研究者番号：00533621

ブランクール ヴァンサン
(BRANCOURT VINCENT)
慶應義塾大学・文学部・訪問准教授
研究者番号：30424211